

『白いジャケツ』私見（その1）

上田 見二

Herman Melville の第5作である、この『白いジャケツ』(*White Jacket*)は、前作の『レッドバーン』(*Redburn*)と、いわば「セット作品」であると見なされる。作者自身がそのように考えていたし、その「セット」に対する自己評価についても、どちらの作品も‘trash’（くず）であると言い切っている点については、前回の拙論¹⁾で述べたので、詳述はさけるが、経済的逼迫ゆえの不本意ながらの仕事であったという背景は重要であろう。さて、この両作品は、作家が自ら言っているように、‘trash’でしかなかったのでしょうか？少なくとも、Melville を研究する者にとって？この問題について、私は上記小論の中で、『レッドバーン』の場合について論じ、結論として“far from ‘trash’”²⁾と評した。では、『白いジャケツ』の場合はどうであろうか？以下、この問題について考察を試みたい。

まず、「セット」の前作である『レッドバーン』との比較の中で、いかなる問題点が指摘できるか。そして、それらの問題点は、他の作品および Melville という作家と、どのように関係しているのだろうか。数回に分けての作業になるが、今回は相互比較に重点を置き論述してみたい。

そもそも、(どのような気持で言ったかは別にして) ‘trash’ と作家自らが呼ばざるをえなかった作品を書かねばならなかったのは、第3作『マーディ』(*Mardi*)の失敗であったと考えられる。『タイピー』(*Typee*)および『オムー』(*Omoo*)の処女作品としての成功が、Melville を文壇に登場させるが、彼には文学者としては、満足しきれないものがあつたに違いない。それは、読んで面白い冒険小説、それも自分の体験にほんの少し創作の色をつけた物語であった。『マーディ』は、がらりと趣を異にする作品に仕上がった。より深い、より形而上学的で、より哲学的な、そして、はるかに象徴的な要素が強烈に感じられる作品である。しかし、それは同時に、一言でいうならば、一気に読むことの難しい作品でもある。「読んで楽しい」本ではなかったに違いないだろう。少なくとも、一般の読者にとっては、換言すれば、普遍性の追求には満ちているが、「エンターテイメント」の要素に、全体として、欠けていると評されるであろう。T. S. Eliot が ‘Literature and Religion’³⁾で、また W. S. Maugham が *Ten Novels and their Authors*⁴⁾の中で主張しているように、文学を読む際の目的は、まず「知的楽しみ」を得ることではなければならない。何はさておき、読んでみて「楽しくない」小説というのは、この文学の大前提において失敗していると言わざるをえない。もちろん、このエンターテイメントという要素が、文学の全てでは決してないけれども、それなくしては、それを含む全体の存在が危うくなる。『マーディ』は、結果として、売れなかったのである。この、言ってみれば、「営業上の失敗」にもまして、Melville にとって痛かったのは、小説家としての創作計画上の失敗であったろう。つまり、せっかくの意欲的作品も、結果として売れなければ、今度は売れる作品を、たとえ不本意ながらにせよ、書かねばならない。「エンターテイメント」を越えた領域に、自己の文学の前進を見い出そうという試みが失敗した以上は、もとに戻って、「エンターテイメント」を優先させた本を、何か書かねばならない。とりあえずの仕事として。

結局、再び「体験談」に帰っていったのである。「体験」というものに頼るのが、もっとも手っ取

り早い方法であった。『レッドバーン』は、前作の初航海の「体験」に、そして『白いジャケツ』は、自国の海軍の軍艦「体験」に材を求めている。『タイピー』および『オムー』と同様に、異国の海の世界が舞台になってくる。ただ異なるのは、食人種が登場するような世界、即ち異文化的要素の強い世界ではなく、作家の生まれ育った「白人の世界」が中心である。初航海の商船にせよ、初めて体験した軍艦にせよ、航海する海は違っても、あくまでアメリカの船であり、乗組みの人間達もアメリカ人や英国人が中心であった。外国を移動するものの、米国船という小さな「アメリカ」、もしくは、上陸という自国からの一時的離脱が舞台になっている。『マーディ』が、その前作同様、南海という異文化の世界を舞台にした事実を考え合わせれば、「自分の世界」つまり自分の読者の世界に、素材をぐっと接近させたことになる。新奇な世界から、よりなじみやすい世界へ、自分の特異な体験の世界から、読者の中に類似体験を期待できるような世界へと舞台が変わったといえる。このことは、Melvilleのそれまでの体験の中から『タイピー』、『オムー』で書いた部分を引き去ると、あとには、この二つの航海体験以外に、まとまった話として語るべき「ネタ」があまり多くはなかったという事情もあるにはあるが、やはり、『マーディ』の失敗の二の舞はしたくないという現実的な気持が、一役買っていると言えないであろうか。

このように、『レッドバーン』も『白いジャケツ』も、同種類の世界を舞台にした「体験」に基づいているが、はたして、実際にはどの程度まで、それぞれの「体験」に基づいているのであろうかという問題が、当然出てくる。しかしながら、これについては、William Thorpの *the Northwestern-Newberry Edition*⁶⁾の詳細な‘Historical Note’を参照するだけでも、その方面の専門家による伝記的探索が十分すぎるぐらい行われてきたことが判るが、ここでは言及をさけることにする。なぜならば、事実かフィクションか、また、フィクションであるとすれば、どの程度までがフィクションかという問題は、(文学研究における重要な問題の一つであることは否定しないが、)小説の文学作品としての価値を論ずる際には、直接には関係ないと思われるからである。作品上の「体験」談の方へ目を向けてみることにする。

問題にしている両作品は、はじめから、その内容について、語り手である‘I’(私)の回想であると規定している。『レッドバーン』については、その副題に、‘Being the Sailor-boy Confessions and Reminiscences of the Son-of-a-Gentleman, in the Merchant Service’⁶⁾とあり、『白いジャケツ』の方は、目次の前にある Note で、

In the year 1843 I shipped as “ordinary seaman” on board of a United States frigate, then lying in a harbor of the Pacific Ocean. After remaining in this frigate for more than a year, I was discharged from the service upon the vessel’s arrival home. My man-of-war experiences and observations are incorporated in the present volume.
New York, *March*, 1850.

と、記されている。以下、両作品とも、‘I’の回想という設定の下で、最後まで語られていく。

『レッドバーン』の主人公であり語り手でもある Redburn の語り口は、‘Son-of-a-Gentleman’らしい屈託のなさ、全体的に明朗な調子を持ち、読者に対してのびのびとした印象を与えるであろうが、この点は、一気に楽しく読ませる要素、即ち「エンターテイメント」の要素という観点から言えば、かなり成功しているといえる。しかしながら、注意深い読者なら、その「語り」が終始同一人物によって語られているかという点については、大なり小なり「不自然さ」を感じるはずである。F.O. Mathiessen は、その *American Renaissance* の中で、

The rest of the book does not quite live up to the opening, since Melville becomes more discursive, and sometimes blurs his effect by neglecting to keep his center of consciousness in Redburn's inexperience, and by adding reflections that could only have occurred to someone much older.

と述べている。(“The rest of the book”というのは、ある水夫の突然の飛び込み事件で、ひとり少年 Redburn が恐怖を正直に表わしたがために、他の水夫達によって罵倒され、それ以後は全く孤独を感じたという、第10章以後をさす。) 確かに、作者の“center of consciousness”は少年の無垢に留り続けることをしない。‘I’は、時として作者 Melville 自身になるのである。

作家である‘I’が登場人物である語り手‘I’に語らせるという形をとる小説では、この‘I’の多様性の問題は常に興味深いものに思われるが、『白いジャケツ』の場合はどうであるか、少しくわしく分析してみよう。

さきほど引用した『白いジャケツ』の Note は、その付されている位置から言っても、創作上の‘I’ではなくて、作者 Melville が語ったものである。(このことは、ここでの問題とは直接関係ないが、本の内容の重要な一部を構成する米国海軍内の諸悪への非難ということを考えあわせるとき、わざわざ、はっきりと証言しているのは、興味あるところである。) しかし、一旦「回想」が始まるや、創作上の‘I’に語らせ続けるという手法は慎重に守られる。作者自身の顔をできるだけ見せないようにしようと努めている Melville の態度が感じられるのである。『白いジャケツ』をはじめて手にし、目次を開いて眺めるとき、その全部で93章(他に、*The End* があって興味をひくが)の中で、一見『白鯨』の話のすじから離脱した章のいくつかを連想させるような、かなりの数の章名が目に入ってくるのである。特に、第33章からの連続4章は鞭刑(flogging)についての章であることが一目瞭然であり、ちょうど『白鯨』の中で鯨に関する章が続くのを想起してしまう。*Moby-Dick* という作品をさきに読んだ目には、(このような読み方は、作者 Melville にとっては、迷惑なのかも知れないが、)必然的反応なのかも知れない。今度もまた、話のすじ、即ちプロットからはずれた、Melville 自身の「講義」をうんざりさせられるほどに聴かされるのかと、若干重い気持ちになってしまう。ところが、作品を読み進んでいくうちに、『白いジャケツ』の場合は、事情が少しばかり違うことに気づくのである。

『白鯨』を丹念に読んだ読者のだれしもが、その読書のおかげで、鯨に関して相当の知識を得ることができるのと同じように、『白いジャケツ』の読者は、鞭刑について、詳しく知るようになり、同時に、少なからず恐怖と怒りの情を禁じえないであろう。それほど、この作品は鞭刑というものについて、相当のスペースを割いているのだけれども、『白鯨』の場合と違って、特定の知識にこだわる余り、ストーリーの展開とそこに登場する人物たちも忘れて、作者自らが、自分の顔を出し、自分の声で、しゃべり続けることは、より少いと言える。このことは、上記の第33章からの連続4章についても言えるのである。具体的に、詳しく検証してみよう。

John, Peter, Mark それに Antone という4人の水夫が、彼等の間では時々あるところの喧嘩をしたがゆえに、船の法律に触れて、艦長の命によりいよいよ鞭刑が行なわれようとしているという場面から、第33章は始まる。“All hands witness punishment, ahoy!”⁸⁾という号令を何度か聞きながら、主人公 White-Jacket も、他の乗組みと一緒に立ち会うことになる。主人公による「実況中継」によって、読者の注意は、鞭刑の行なわれている Neversink 号の艦上へ釘づけされるであろう。次の第34章‘Some of the Evil Effects of Flogging’は、前章とくらべてかなりむずかしい話が続く。これは、この章が鞭刑についての、“incidental considerations”⁹⁾についてであるという性質上、ある程度は避けられないかも知れないが、それでも、Neversink 号の生々しい現場に釘づけた読者

の目を、同艦から逸さないようにすべく、一般的な話がしばらく続いたあと、“This was the custom in the Neversink.”¹⁰⁾というセンテンスを加えるのを忘れない。この手法は、次の第35章‘Flogging not Lawful’でも見られる。冒頭からの難解な法律の話が続いたあと、

While I was in the Neversink, the Captain of an American sloop of war, from undoubted motives of personal pique, kept a seaman confined in the brig for upward of a month.

と、続ける。読者の注意を Neversink 号へと戻そうとする努力が見られるのである。しかしながら、以降の部分は、ブラックストーン男爵やユスティアヌス法典のことが登場して、法律談義が続く。夢中になって次元の高い話を進めるが、あまりにも水夫 White-Jacket の像が遠のいたことを恐れてか、次章（第36章）に入るなり、“But White-Jacket is ready to come down from the lofty masthead of an eternal principle, and fight you—Commodores and Captains of the navy—on your own quarter-deck…”¹²⁾（下線は筆者）と続けるが、読者はそこに White-Jacket よりも Melville 自身の存在の方を感じるであろう。水夫の白いジャケツよりも、作家の数少ない写真の一つに見られる、いかにも“eternal principle”にこだわりそうな、口髭の方を想像してしまいがちである。話は、再び鞭刑一般について、歴史的に英国海軍の場合へ溯り、『ピリー・パッド』でも述べられるネルソン提督やノアの大反乱にまで及ぶのである。「小説」というよりも、なにか歴史書を読まされているような錯覚におちいるのは、私だけではなかろう。ところが、最後には、“But in many things we Americans are driven to a rejection of the maxims of the Past…”¹³⁾と、アメリカの話へと帰ってくるのである。しかし、もはや我々読者には Neversink 号の姿は感じられない。Neversink 号よりもアメリカ海軍一般について、いやアメリカ海軍よりもアメリカ合衆国と、その“the Israel of our time”¹⁴⁾であるアメリカ人についての雄弁に終わっているからである。

以上の観察から言えることは、作家 Melville 自身の声で、“eternal principle”を追求するあまり、英国と米国の鞭刑について、格調高くかつ熱っぽく雄弁が続けられる中で、語り手はあくまで水夫 White-Jacket であり、場所は Neversink 号上であるという点が、上に引用したような文句を挿入することで、強調されているということである。同時にまた言えることは、その強調は、必ずしも十分に成功しているものばかりではないということである。この事実は、否定的な見方をすれば、『白鯨』の例の鯨学的諸章に近い面を、この鞭刑に関する数章が持っていると言えなくもないが、プロットの展開というプロセスの中に当該の章を位置づけようとする努力がなされる以上、（その努力の結果は別にして、）この『白いジャケツ』の例と『白鯨』のそれとを同一視することは、作家に対して少しばかり酷というものであろう。

鞭刑に関するものの他にも、例えば、第55章‘Midshipmen entering the Navy early’（この章はわずか2ページ足らずである。）のような、この小説のプロットからは独立した要素を強く有する章および部分を、いくつか指摘できるかもしれないが、読者としては、『白鯨』の場合ほど極端な例の数々に当惑することはないのではなかろうか。『白鯨』との比較という、いわば相対的評価の前には、他にもいろいろと違った見方が可能であるかもしれないが、作品『白いジャケツ』という本を、英語で言う‘as such’なものとして読むとき、もっとも重要なことは、再び W.S.モームの言葉へ戻るが、『知的楽しさ』という「絶対的評価基準」ではなかろうか。私が強調したいのは、要するに次の2点である。つまり、この作品に於ては、語り手と語り手の口を通じて語っている作者の両者の像が、時として後者が前者を押しつけて、読者の前に進み出ることはあるという点、さらにもう一つは、それにもかかわらず、作品全体としては、ちょうどピッチングやローリングを経験しながらも、とに

かく“homeward-bound”¹⁵⁾の航海を前へ進み続ける Neversink 号のように、読者の「知的楽しさ」を維持し続けることに成功しているという点である。これらの2点が、『白いジャケツ』の場合に結論されるし、同時に『レッドバーン』との相互比較の視点として提示されねばならないだろう。

『レッドバーン』についての前回の小論で、私は“I-shift”が発生する位置とその内容との間に見られる相互関係の重要性について指摘した。Redburn というより Melville が熱っぽく語りかけるとき、それは前者が乗組んでいるリバプール航路の商船についてよりも海一般についてであり、具体的な登場人物についてよりも人間一般についての普遍的真理についてであった。一言で言うならば、White-Jacket が奇しくも言った、例の“eternal principle”について語るとき、Redburn の顔は Melville の顔へとだんだん近づいていき、F.O.Matthiessen の言うように、確かに“someone much older”の声になっていったのである。しかも、大変に熱っぽい調子で。

作家自身の声で最も熱っぽく語り、時に叫ばれるのは、この世界の、特に文明化された世界に存在する‘evil’で‘bloody’な事象についてであった。「白さ」の‘evil’な面について『白鯨』の中で弁ずるとき、Melville は彼以前および以後のどの文人より雄弁であったが、これと同じように、『レッドバーン』の中で、(時代は若干前後するが、オスワルト・シュペングラーが言うところの)『この地球上で完成されようとしている、唯一の文化、即ち西ヨーロッパ・アメリカ文化』¹⁶⁾について批判するとき、Melville はすさまじい迫力を持って、読者に迫るのである。当時もっとも文化が花咲き、文明国であったはずの大英帝国のリバプールで、Melville は肉声で叫ぶ。Launcelott’s-Hey で “What had been a woman”を見て極度のショックを受けた Redburn は “Ah! What are our creeds, and how do we hope to be saved? Tell me, oh Bible…”¹⁷⁾と絶叫する。それは、他ならぬ、文明国の‘iniquitous’な実情に対する、怒りと失望の入り混った絶望であった。そして、これらすべての Melville の肉声は、『白いジャケツ』の中の米海軍の諸悪に対する非難・糾弾へ通じるものに他ならない。作品は違っても、同じ作家の同じ声が聞こえてくる——同じ目標に向って、同じ調子で語っているのが。

1849年のうちに、立続けに書き上げられた、『レッドバーン』と『白いジャケツ』の間には、以上のことから、非常に高い類似性が存在していると言えるのである。

これまでの分析は、作品に見られる‘I’の多様性、即ち‘I’の shift の仕方という視点からのものであったが、明らかになった『レッドバーン』と『白いジャケツ』との間の共通性、あるいは類似性は、Melville という同じ作家のイメージと内的世界の輪郭を映し出すに十分である。オスワルト・シュペングラーは、その大作『西洋の没落』の中で、思想家にとっての真理とは、『自己と共に自己の世界像として生まれたもの』であり、それは即ち『彼自身であり、言葉に要約せられた彼の本質であり、一生を通じて変ず可からざるもの』¹⁸⁾であると定義している。Melville の作品群の中に見られる共通性が映し出すところの彼の「内的世界」の中に、彼の世界像が見え、彼の思想家としての要素が強く感じられるとき、このシュペングラーの言葉が深い示唆をもって響いてくるのは、私だけであろうか。文学作品というものが、文学者という名の思想家にとって、『言葉に要約せられた彼の本質』である限り、『一生を通じて変ずべからざるもの』が必ずや存在するはずである。それは、小説(と一口で言っても、19世紀のアメリカ文学のそれは、romance の伝統の中にしか全体像は見えない本質を有する。)という文学形態の中でどのように存在しているのであろうか。

さまざまな問題が提起されるし、今後の課題として、考察されねばならないが、今回の分析の視点であった‘I’の問題というもの以外からでも、作品間の類似・共通パターンは指摘される点を忘れてはならない。登場人物という小説の一大要素の中に、また数多くのアレゴリー的要素の中にも、共通性の問題は追求されねばならない。『レッドバーン』の Jackson と、この『白いジャケツ』の先任衛兵伍長 Bland は、作家の「遺作」である『ピリー・バッド』の Claggart と多くの共通点を持つ。

これらの作品の愛読者は、その身近に存在する邪悪な「二本足の悪魔」を見るとき、あるいは Redburn のように恐怖をおぼえ、あるいは White-Jacket のように憎悪しながら、Melville の創りあげた悪人を連想するに違いない。それから、これは共通・類似の問題のパラドックスであるかも知れないが、『白いジャケツ』で十分とは必ずしも言えないながらも見られた、プロットからの逸脱を避けようとする努力が、なぜ次作である『白鯨』の中では、かくも多くの章に於て、かくも徹底してなされなかったのであろうか。他にも、『白いジャケツ』は多くの問題を残す作品であるが、以上のような諸点については、次回論究してみたい。

〔注〕

- (1) 『別府大学紀要』、第22号(1981年)、『An Interpretation of Herman Melville's *Redburn*』
- (2) Ibid.,p.71
- (3) T.S.Eliot, 'Literature and Religion,' *Selected Essays* (1962) p.134
- (4) W.S.Maughm, *Ten Novels and Their Authors* (1963) p.198
- (5) Herman Melville, *White-Jacket* (Evancton and Chicago, Northwestern Univ. Press,1970)
- (6) Herman Melville, *Redburn* (Evancton and Chicago, Northwestern Univ. Press, 1969)使用
- (7) F.O.Mathiessen, *American Renaissance* (New York, Oxford Univ. Press, 1941) p.397
- (8) *White-Jacket*, p.134
- (9) Ibid.,p.139
- (10) Ibid.,p.140
- (11) Ibid.,p.144
- (12) Ibid.,p.147
- (13) Ibid.,p.150
- (14) Ibid.,p.151
- (15) Ibid.,p.400
- (16) オスワルド・シュペングラー、『西洋の没落』（第1巻）（村松正俊訳、桜井書店、1944）p.17
- (17) *Redburn*,p.184
- (18) 『西洋の没落』、p.4